魔法戦記リリカルなのは　～駆け巡る雷光～

ジュデッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦記リリカルなのは　～駆け巡る雷光～

【Ｎコード】
Ｎ１３６５Ｌ

【作者名】
ジュデッカ

【あらすじ】
ＰＴ事件と呼ばれた事件終結から三ヵ月後―――その事件に関わった二人の人物は、時空管理局の士官学校に入学していた。其処で繰り広げられる戦い、更なる魔法というものへの追求、そして出会い。そして、彼らの知らない所で暗躍する者達―――物語は今、動き出そうとしていた。
本作はＦＦ１３とリリカルなのはのクロス作品です。更にネタバレや独自設定、オリジナルキャラが数多く出演するなどの内容になっておりますので、苦手な方はご注意下さい。

第一話　士官学校（前書き）

※今作を読む前に注意事項！

今作は前作『魔法少女リリカルなのは　～記憶を失いし雷光～』からの続編……中間話や過去話になっております。

それを見なくても分かる内容にはしようと思っておりますが、一応前作もご覧になってからご購読なさる事をお勧めします。

第一話　士官学校

目の前から数個の魔力弾が迫る。
数は六つ。しかし、数だけであり速さや威力というものは其処までない。
ただ此方に（こちら）に対しての牽制――――というのが正しいだろう。　そうと分かれば、それと相対している人物はすぐに考えを纏(まと)め、その魔力弾の回避を選択する。
直射型の魔力弾が迫る中、その人物は大胆にも大きく回避行動を取る。追尾型でない以上、追われる心配もない。
だが、それも相手の作戦の一つだという事も良く分かっていた。
いや、此処最近では目の前の人物としか戦っていないのだから嫌でも分かるというものなのだが。
回避行動を終了すると、予想通り接近してきた相手に対して己がデバイスを向け、同じようにデバイスを向けてきた相手と激しい音を立てながらぶつけ合う。

互いがぶつかった瞬間、その間には僅かに火花が飛び交う。
だが、両者はそんな事等一切気にせず、ただ互いを落とす為に激しく刃をぶつけ合った。

「はぁ！」

一方が気合を入れて純白に染められたデバイスを振るうと、それに押されたのか、もう一方の変わった形をしているデバイスの所有者はたじろぐ様に防御の構えを見せる。
それを好機と思うと、純白に染められたデバイスの持ち主は追撃

を仕掛ける。
追撃を掛けてきたのを察すると、変わった形をした剣のデバイスの持ち主は一端眉を寄せると、打って出るように再び剣を合わせに赴く。
互いに剣を出すスピードが早く、あっという間に剣を防ぎ、弾く。だが、両者の剣は止まる事を知らないのか、それでも尚剣を出して打ち合っていた。

「ちっ……」

埒があかない事を察した純白のデバイスの持ち主は相手を弾くように剣を振るい、そのまま少しだけ後退する。
弾かれた方は、恐らく純白のデバイスを持った人物が斬撃魔法を行使してくるのだろうと推測する。
果たしてその予想は的を得ており、純白のデバイスが真紅に染められる。それに対するかのようにその相手も刀身に炎を纏(まと)わせて突っ込む。
その速い動きにデバイスを真紅に染めた方の者は受けて立つとばかりに柄を握ると、同様に突撃を敢行する。
この際、下手な小細工は必要ない。いや、それは邪道というべきだった。
ただ、己が力を持って相手を圧倒するのみ。それは此処数日のおいて、両者が共に理解している事だった。

「はぁ！」

「甘い！」

真紅に染められた剣が身を掠めるのが分かったが、これは計算通り。

自分から突撃していったものの、攻撃は相手から先にやらせた。これはわざと後手に回ったからである。
確かに相手の剣先は早いが、まだ此方にとっては捉えられるスピードであった。普通の相手ならばこの一撃で落とされているであろうが、生憎(あいにく)相手が悪かったのだ。
ならば、後手に回っても良いので、ギリギリまで引き付けて回避。其処にカウンターを仕掛けるような形で一撃を叩き込むというのが策だった。

「落ちろっ！」

「ぐっ！　だが…」

雷を纏わせた剣で直撃を入れようとした瞬間、相手は自らの右腕に魔力を送り込み、一時的に魔力の渦を纏わせる。
それを刃に向ける事によって、その剣先を何とか防ぎきる。これには驚くしか方法が無かった。

「魔力で剣を防いだだと……っ！」

「はぁ！」

驚いている間に相手は、再び弾き返して間を作る。苦々しげな表情を浮べるが、少しだけ笑みを浮かべると、再びその剣を構える。
相手も同様に剣を構えると、グッと力を入れて対峙する。
そのまま両者は少しの間動かなくなったが、自らの汗が零れ落ちた瞬間、ほぼ同時に二人は動き出した。

「両者、其処まで！」

だが、両者がこれから再び剣を打ち合わせようとした所に突然静止の声が掛かる。
それを聞いた両者はその場で止まると、互いのデバイスを収めて地上に降りた。

そう、今までの戦闘は所謂(いわゆる)模擬戦である。
だが、模擬戦といえども手は抜いておらず、本気の勝負だ。
いや、これまでにも本気の勝負というものは何度もしてきていた両者であるので今更という感じではあるのだが。

「グラトス教官、今の戦闘の評価点を伺いたいのですが」

「……45点だな。確かにお前達は魔法戦闘を何度もやってきているらしいが、まだ無駄な動きが多い。それは前回の模擬戦においても明らかだ」

無精髭を生やした三十代くらいの男であるグラトス教官と呼ばれた人物がそう話すと、桃色の髪をした少女――先程の変わった形の剣のデバイスを持っていた方――は少し納得したように頷く。
確かに、先程の模擬戦では相手の動きが分かっていたからこそ、自分でも無駄な動きが多いように感じられた。
それをグラトス教官も見破ったのであろうし、それは彼女自身が一番痛感している事だった。
一方の対戦相手である少年――純白の剣を持っていた方――もその評価に納得していた。
前回の経験を元に今回試した新たな戦闘方法も考えていたが、結局はこのような結果になってしまった。いや、余計な事を考えすぎた結果であろう事は見えているが、それを口に出す事はしなかった。

「では、修正点としてグラトス教官から上げる事は？」

「それはお前達自身で考える事だ。俺が話す事じゃない」

グラトスの答えにそれは尤もだ、と傍らで見ていた桃色の髪の少女は思う。

人から教わるのも大事だが、それよりも先に自分で考える事の方がもっと大事な事だ。質問をした少年は少し不服そうだが、分かっている故にそれ以上の質問は止める。

と、其処でグラトス教官が再び二人の方に向き直ったかと思うと、二人に対して次の指示を出し始めた。

「今回の模擬戦の反省として、両者にはこの学校の周辺を三十周走る事を厳命する。いいな、ライトニング候補生、並びに黒羽候補生」

「「はっ！」」

「宜しい。制限時間は一時間半だだ。尚、終わり次第三十分間の昼食、それから次のカリキュラムに進め」

そういってグラトス教官は踵を返し、ゆっくりとした足取りでその場を去ってしまう。

その様子を敬礼しながら見送った桃色の髪をした少女———ライトニングは姿が見えなくなると同時に嘆息し、呟く。

「だそうだ、隼人」

「だそうだって……はぁ、これで七回目だぞ？」

「それは仕方が無いだろう。私達は一ヶ月遅れで此処に入学している。間に合わせるためには当然の事…だろう？　それに…」

「……あぁ、分かってるさ…」

ライトニングの言葉に、銀髪の少年――――黒羽隼人は呆れたように言葉を返す。

こんな仕打ちを受けるのも自分の中では分かっているつもりだ。おまけに特例で入ってきたのも重々承知している。

おまけに、面と向かっては言われないものの、先程のグラトス教官は違うが、それ以外の一部の教官や他の候補生達に白い目で見られているという事も同義である。

これには彼の過去――――といっても、隼人の事ではないのだが――――が関係しており、隼人としても仕方が無いと思っている。

二人はふぅと一回だけ溜息を吐くと、そのままゆっくりとした足取りからスピードを上げていき、走り去っていく。

「負けた方が今日の昼食の奢りだ。分かってるな、隼人？」

「おい、今更になってそんな事をいうなっ！」

此処は士官教導センター――――――――通称、士官学校と呼ばれる場所。

この場所はその名の通りに管理局に存在する幾多の部署に配属する為の育成機関とも呼べる場所の一つであり、主に管理局が今現在一番保している“人材”を育成する場所でもある。

ただでさえ人材が足りないと嘆いている現状だからこそ、こうした育成の機関というのは重宝される。

しかし、それ故に育成した全員が思い思いの部署に行けるといえ

ば嘘になる。それぞれが狭き門であり、それに見合う試験内容が待ち受けているのである。
この士官学校……それも士官候補生コースは、所謂エリートが通る道である。
おまけに、エリートにはエリート並の施設や環境は取り揃えてある。それ故に訓練は相当に厳しく、毎年訓練内容半ばで諦める者がいるというのも少なくない。
そんな過酷な内容だからこそ、成長すれば使える人材になるのもまた然りだ。
尤も、其処まで行くのが大変なのだが。

先程から一時間後、ライトニング達はグラトス教官からの指示にあった士官学校周辺を三十周という作業を終え、束の間の休息という時間――――昼食に入っていた。
ちなみに先に三十周を走り終えたのは僅差でライトニングであり、隼人は昼食を奢らされる羽目になっている。
終わった瞬間、隼人が悔しそうな目付きでライトニングを見ていたが、ライトニングが涼しい顔をしながらそれを流したのは言うまでもない。

「で、何を食べるんだ？」

「そうだな……今日はAランチだ」

「よりによって一番高いものを選びやがって……」

未だに悔しいのか、物々と何事かを言いながら食券の販売機に向かっていく隼人。
そんな隼人のお小言など全く気にしないライトニングであり、先

程同様に涼しい顔をしながらその後を追う。
隼人は食券販売機に小銭を入れ、Ａランチとかかれたスイッチを押すと、ウィーンという音と同時にＡランチと書かれた食券が落ちてくる。
それをライトニングが受け取ると、少しだけライトニングは隼人に対して笑みを浮かべた。

「すまないな、隼人」

「くそっ、その得意げの顔が更にイラつく……！」

嫌味たっぷりの表情を隼人に向けてやると、予想通りの表情をしてくる。
そんな隼人にライトニングは踵を返すと、Ａランチを受け取る為に歩き出していった。

「ちくしょう、あの女…！」

「また負けたの、隼人？　これで勝敗は五分五分…だったよね？」

突如、隼人の後ろから声がしたので、隼人はハッとして振り返る。
すると、其処には髪の色は金髪に近い黄色で、隼人よりも背が高い少女が其処に立っていた。
隼人は驚いて少しだけ後ろに下がる。その様子が可笑しかったのか、その少女はプッと吹き出すように笑みを浮かべた。

「プッ…あはは！　そんなに驚いた？」

「そ、それは……！　いきなり声を掛けられれば、誰だって驚きますよ！」

隼人が何時になく敬語で話すと、その少女は不服そうに頬を膨らます。
そして、ビッと指を突き立てると、隼人に迫りながらこう言ってきた。
「年下でも一応同期なんだから、敬語は禁止って前にも言わなかった？」
「しかし…一応年上ですし……そう簡単には…」
「ん～？」
「……分かったよ、マリン」
「よろしい。聞き訳が良くていいわね、隼人は」
フフンと勝ち誇ったような姿で隼人を見てくるこの少女に、隼人は呆れたように溜息を吐いた。
この少女の名はマリン・アスレスといい、第６７管理世界セイレーンの出身である。
おまけに少々裕福な育ちであるのだが、父親が時空管理局の本局航空武装隊の隊員である為、それに憧れて管理局を志すようになったのだという。
他の候補生が隼人とその傍にいるライトニングに白い目を向けている中、ただ一人彼らに駆け寄って行ったのも彼女であった。
周囲からは『変わり者』と呼ばれているが、彼女は全く気にしていない。
その時、先程Ａランチを取りに向こう側に行っていたライトニングがおぼんにＡランチを乗せて歩いてくると、マリンはすぐに彼女

の方に振り返った。

「あっ、ライト。これから昼食？」

「そのつもりだ。マリン、お前もどうだ？」

「うん。一緒に食べよって声を掛けようと思ったらさ……フフッ」

隼人を見ながら再び笑みを浮かべるマリンに対し、隼人は呆れたように再び嘆息した。

そう何時までもネタにされれば溜まったものではない。それに、あれは不意打ちというものだ。幾ら隼人といえど、そのような出来事は弱い。

といっても、それが戦闘に反映される訳ではなく、あくまで通常時のみだ。戦闘では恐ろしいくらいに冷静的に判断できるので心配はない。

ちなみに、彼女がライトニングの事をライトと呼んでいるのは、彼女がそう呼べといったからだ。

ちなみになのはもライトさんと呼ぶようになっており、ライトニングも同様になのはの事をなのはと呼ぶようになっている。

「はぁ…」

「溜息ばっかりだと、幸せが逃げちゃうよ？」

「じゃあ、そうさせないようにしてくれ……」

肩を落としながら呟く隼人に、マリンとライトニングは苦笑するしかなかった。

◇

「そういえばさ、何で二人は嘱託魔導師の資格があるの？」

席に着いて昼食を食べだしてから一分ほど経ったであろうか、マリンが唐突に二人に対してそんな事を聞いてきた。

急にマリンがそのような事を聞いてきたので、二人は少しだけ疑問に思うが、別に隠すような事ではないし、話すことにする。

「まずはコイツの裁判中を有利にする為。そして私はそれの付き添いで取ったようなものだ」

「裁判って確か、第９７管理外世界で起こったＰＴ事件関連？」

マリンがそう尋ねると、今度は隼人が頷いて話し始める。

「ああ。裁判を迅速に終わらせる為には、こうするしか方法が無かった。下手をすれば生涯幽閉なんて可能性もあったからな。……乗せられたような気もするが」

そう、隼人はあの事件――――三ヶ月前に発生した事件の首謀者でもあった。

ただ、本人にはその自覚というものは全くなく、操られていたという事も調査で分かっている。

それも含めて審議されたのだが、どういう訳か、首謀者の娘であるフェイトは未だに裁判の真っ最中だというのにも関わらず、隼人は一ヶ月ほどで裁判が終了し、今は士官学校にいるのだ。

これは嘱託魔導師の資格を取ったのも大きいが、やはり裏で何か

しらの動きがあったのは目に見えている。
フェイトが未だに続いて、隼人だけが終了などおかしいのだ。確かに隼人の場合は操られ、フェイトは目的を知らなかったとはいえ、加担したのだとしてもだ。

ちなみに、隼人とライトニングは裁判が終わる五日前にこの嘱託魔導師の資格を手にしている。
資格を取る事は叔父であるジン・スカーレットや今はフェイトの裁判の補佐をしているクロノ・ハラオウンに進められたからでもある。
しかし、同時にこれより管理局に従いますといういらない名目のもとでだ。いや、今は士官学校にいる訳なのだから、それも当たり前の事かもしれない。

この嘱託魔導師になる為には、やはり過酷な試験が必要になる。時空管理局はかなり強い権限を持っている為、嘱託といえどもそうせざるをえないのだ。
内容としては、筆記試験や儀式魔法実践４種、更に戦闘試験などが存在する。
二人は、まずは筆記試験に合格する為に一週間ほど猛勉強し、現在に至る。ちなみに戦闘試験などはあまり苦ではなかったとの事。
ちなみに、そのせいで二人は士官学校に一ヶ月遅れて入学する羽目になった。別にライトニングは付き添う必要などはなかったものの、彼女が好きでやった事だから別に構わないらしい。
しかし、そのおかげで二人は他の候補生に追いつく為にメニューが多く組まれている。
例を挙げるのならば、他の候補生は１８時間ほど訓練やそれぞれのカリキュラムを行っているが、二人については２１時間を越す事もある。もはや労働基準法が…などと呼べるレベルではないのは確かだ。

しかし、二人はそれに諦める事無くついて来ている。先の三十周もその中の一つである。

「それに、嘱託魔導師は民間魔導師とはいえ、異世界での行動がかなり自由になるからな。その分でもメリットは大きい」

「そうなんだ…。大変だったね、二人とも」

バツが悪そうな表情で俯くマリン。

先程まで進んでいた箸も止め、何やら聞いてはいけなかったような内容なので、思わずこうなってしまったのだ。

そんな彼女の様子に隼人はただ首を振り、彼女に対してこういってやる。

「別にそんな大げさな話じゃないさ。気にするな」

「でも……」

それでも尚、俯くマリンに対して隼人は頭を掻く。

本人としては重い話をした訳ではないが、彼女にしては聞いてはいけない事だと思ったのだろう。

そのままどうしようかと思っていた矢先、ふと時計が目に映った。

すると、其処には後１０分ほどで先程指示された３０分が経とうとしており、ギョッとしてライトニングとマリンに声を掛けた。

「おい、二人とも！　早く食わない時間が無いぞ！」

「え？　……うわわ、本当だ！　何で早く言ってくれないのよ！」

「話をさせたのは誰だよ！？」

思わずツッコミを入れる隼人だが、そんな事を話している場合ではないと箸を動かす。
とりあえず口に頬張り、少し噛んだだけで水で流し込む。体に悪いが、そういっていられない状況だ。

「た、食べ終わらないよ～」

「喋ってないでさっさと食え！」

「やれやれ……」

必死に箸を動かしている二人を尻目に、早くも食べ終わっているライトニングが呆れたように首を振るのだった――――

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

隼人「“少女”じゃない！　“戦記”だ！」

ライトニング「…冒頭から何を言ってるんだ、お前は？」

隼人「いや、いきなりタイトルが変わったから一応言っておこうと思ってな」

ライトニング「無駄な事を……」

隼人「……で、これは前作の続きなのか？」

ライトニング「そうだ。といっても、外伝らしく、色々話が飛ぶ事を覚悟しておけ」

隼人「で、あのよく分からないコーナーは？」

ライトニング「あぁ、あの混沌（カオス）なコーナーか。あれは外伝では打ち止めだ」

隼人「だから、俺達しか出ていないと？」

ライトニング「そうだ。暫くは爺も変態もお前の幼馴染も出てこないからな。暫くは真面目にやれそうだぞ」

隼人「本当に暫く……だよな、はぁ」

ライトニング「という訳で、今回はキャラ紹介も含める。今回の紹介はこの私とこのヘタレ、更にマリン・アスレスにグラトス教官だ」

隼人「……くそっ、コイツといると調子が狂う…」

ライトニング「お前の素じゃないのか？」

隼人「お前は黙ってろ！」

■ライトニング
　元コクーン警備軍所属。どういう訳か光に包まれ、この世界へとやって来た経歴を持つ。身体年齢１１歳。
　ＰＴ事件から三ヵ月後の本作では時空管理局の士官候補生として士官学校に入学。ちなみに、士官学校入学はこれで二度目である。
　ちなみに、一ヶ月の間に嘱託魔導師の資格も取っている。本人曰く『隼人が裁判の間は正直暇だったから』との事。何故、自分だけ先に入学しなかったのかはよく分かっていない。
　彼女のデバイスはブレイズエッジ。
　基本は剣の形で運用するが、時に銃型に変形させて運用する事もある。主に近・中距離戦闘が得意。
　ちなみに彼女はオーディンという召喚獣――――レアスキル持ちである。しかし、これはロストロギアにも匹敵する為、現在は使用していない。
　これは士官学校側の意向でもあり、また彼女自身もこれを使えば楽に戦況を塗り替える事も重々承知している為。
　本作の主人公であるが、前作は最終回で辺りであまり出番がないという事態が起こった。今作ではなるべく出番を増やしたい。
　魔導師ランクは『ＡＡ＋』並。しかし、オーディンなどを含めると、ＳＳを軽く越えるほどの実力を持つ。

■黒羽隼人（くれはやと）
　ミッドチルダ出身だが、訳あって第９７管理外世界地球で育った少年。９歳。
　前作のＰＴ事件にて、仮面の人物として暗躍。フェイト達の手助けをし、前述のライトニングと死闘を繰り広げた。

本来の彼は6年前の次元震動に巻き込まれて死んでおり、今の彼は『プロジェクトF．A．T．E．』と呼ばれる計画のプロトタイプでもある。すなわち本物の黒羽隼人のクローン。
彼はなのはとの決着の後、時空管理局本局に連れられて裁判を受けている。
しかし、一ヶ月で裁判が終了した点からも隼人自身も不審に思っており、これに前作の本当の黒幕であるイトロ・シュルーベンの関与があると考えている。
このうちにライトニングと同じく嘱託魔導師の資格を取っている。
ちなみに士官学校に入学する際に元々の小学校である聖祥小学校を退学して此方に来ている。
ちなみになのはとは手紙やビデオレターでやり取りしており、一応連絡は取り合っているらしい。
魔導師ランクはショーン曰く『ＡＡＡ＋』。

■マリン・アスレス
第６７管理世界セイレーンの出身。１４歳。
本文にもあったように裕福な所から出ているが、父親が本局航空武装隊に所属している事から、憧れを持って士官学校に入学した。
ちなみに家を飛び出すような感じで出てきている。
年上ながら、二人とは同期なのだからと敬語を使わせていない。
ライトニングの事をライトと呼ぶのもその為だが、これはライトニングからの承諾を得たからでもある。
魔導師ランクはＢ。少々力不足だという事は本人も自覚している模様。

■グラトス・レーン

教育隊からの出向。４２歳。

初めは生徒達に直接教える事は少なく、何がいけなかったのかを自分で考えさせるように考えさせるような人。

しかし、どうしても分からない場合やまたも同じミスをするなどすれば分からせる為に鉄拳制裁を行使し、その本人に問題点を体で教えつける。

現在は夏合宿までにライトニングと隼人を他の候補生に追いつかせる為のカリキュラムを組んでいる最中。その為には一日の睡眠がないなどは当たり前であり、根を上げることなど許さない。

ライトニング「私は正直思う。これからもこの小説は続くのか…と」

隼人「いや、外伝だから続けてもらわないと、今後が分からないぞ…？　まぁ、不定期ではあるが…」

第二話　合宿＋レポート１

士官学校の朝は早い。

早朝四時に起床し、休む暇などある筈も無く、すぐさま三時間ほどの走りこみに入る。

昨日の訓練の疲れも抜けきっていない体にとって、この早朝走りこみは拷問に近い。

だが、やらなければ教官より嫌というほどの愛の鉄拳制裁を喰らうであろうし、そんなカリキュラムが組まれているのを承知で入学したのだ。

弱音を吐いている暇など無い。

そんな思いがあるのかないのかはいざ知らず、訓練場に候補生達がぞろぞろと集まってくる。

だが、訓練場に着いた彼らの視線は、とある二人の方向に向けられていた。

とある二人の候補生がヒソヒソとその話を始める。

「おい、あいつ等まだ走ってるぞ……」

「マジかよ…。これで二十八時間連続だぞ？　絶対死ぬって、ありゃ」

ひそひそと候補生達が呟くのを尻目に、黙々とその二人は歩を進める。

だが、よく見てみるとその目から生気というものは見られない。

ハッキリ言って、その目は怖い。

もはや気力だけで走っているといっても過言ではなく、これは

拷問に近いのでは？　と誰もが思った。

そんな時、二人の姿を監視するようにドッシリとした様子で構えていたグラトス・レーン教官が、未だに動き始めていない他の候補生達を見つけると、開口一番に怒鳴り声を上げた。

「貴様等！　何をたるんでおるか！　さっさと動かんか、馬鹿者共がっ！」

「「「さ、サー、イェッサー！！！」」」

グラトスの怒鳴り声を聞いた候補生達は二人に習うように走り始める。

その様子を見たグラトスは傍らにあった椅子に腰掛けると、未だに走り続けている二人――――ライトニングと隼人を見始める。

グラトスはこうして見ているだけだが、その目の下には薄っすらとクマが出来ている。

というのも、グラトスも二十八時間前から此処で見ており、一睡もしていない。それでも食い入るような表情で見ているのは、彼の性分なのであろうか。

兎も角、逃げる事など出来ず、今までひたすら耐久マラソンを敢行しているのだった。

拷問とか、そんなちゃちなレベルではない。これはもはや地獄である。

おまけに少しでもペースが乱れれば、すぐさまに怒声が飛ぶ。

ほんの一瞬だけ違っただけで怒声が飛ぶのだからしょうがなかった。

グラトスは他の候補生達が走り出したのを見て、チラッと時計を見る。

丁度頃合だな、と内心で思うと、ザッと立ち上がり、二人に対して声を放った。

「ライトニング、黒羽！　他の候補生が走り終わると同時に終了とする！　ペースを乱すなよっ！」

「「……」」

その言葉に、二人が答える事は無い。いや、声を放つ気力すらなかった。

ただ、黙々と走るのみ。

今の二人にとって、それが絶対であったのだった。

ちなみに、これがこの拷問マラソン（？）が終了次第、二人には三時間ほどの休息が与えられたそうだが……休んでいるときの彼らの目は死んでいたらしく、誰も近寄れなかったらしい。

これには友人であるマリン・アスレスも気の毒に…としか思う事は出来ず、更にその三時間後には、また訓練に駆りだされたそうな。

後に、ライトニングにその件に関して聞いてみたマリンは、このように返事が帰ってきたと言う。

「ちなみに何時もどんな訓練をしてるの？」

「ん？　この間は強制ギプスをつけながら、山の頂上まで登らされたぞ。まぁ、頂上に上った瞬間に突き落とされて、三回ほど登る羽目になったが……それがどうした？」

「……あ、あはは…。うん、私達とは別次元ってよく分かったよ…。それからライトと隼人が主席と次席だって事も……」

その言葉を聞いて、マリンはもはや気の毒ではなく、こいつ等は一体何？　と思うほかなかったのだった。
ライトニングと隼人は不思議そうな顔をしていたが、本来ならば其処まで過酷な訓練などやる筈が無い。
確かに訓練は厳しいいけれども、彼らのは既に別次元だ。
とても真似できるものじゃないのは、百も承知……いや、真似など絶対にしたくなかった。

◇

時間は飛んで、夏場。
この時期になれば、高校の部活などが何処かに合宿をする…というのは知っての通りだろう。
それは、時空管理局の士官学校も同様であり、更なる体力、魔力向上の為に夏合宿というカリキュラムが組まれているのだ。
これを経験したクロノ・ハラオウンはこう言った。

「あれは地獄なんてものじゃない。まさに生きるか死ぬかの瀬戸際だったと思うよ…」

と、言いながらに当時の事を思い出したのか、明後日の方向を見ながらそう呟いたそうな。
その後で、エイミィが面白いクロノの過去話を話してくれたが、彼の面子にも関わるので割愛する。
そんな理由もあり、当然ライトニング達にも火の粉のように降り

かかってくる夏合宿という項目。
これは毎年変わるらしく、今年は少人数の班ごとに振り分け、その面子で訓練するという形式になっている。

「あるぇー　？（・３・）」

と、いきなりこのような表情になったのは、言わずと知れたマリン・アスレスであった。
彼女は訓練場に着いた途端にこのような表情になり、キョロキョロと辺りを見渡すや否や、後方にいた黒羽隼人の方に向く。

「ねぇねぇ、海は？　砂浜は？　合宿っていったらやっぱり海だよね？　砂浜でタイヤとか引いて走るんだよね？」

「……何処の熱血漫画だよ、それ」

マリンの言葉を聞いた隼人は、やや呆れた様子で彼女に言ってやる。
ちなみに、彼女の名前もまたマリンなので、それも関係があるのかも知れないが。

「だって、お父さん曰く、『夏合宿は海だ！　だからお前もマリンの名を付けたんだぞ、ガッハッハッ！』って言ってたよ！？」

「いや、知らないぞ、そんな事……」

いきなり名前の事情を言われても、軽く流すしか方法が無い。
それにしても、訓練学校の時の思い出を娘の名前にするとは、一体どういう親だ？　と、隼人は思ったが。
そんなマリンの様子を見て、隼人の隣にいたライトニングも同様

に辺りを見てみる。

「見事なまでに……森だな」

「見るまでもないだろ……此処は山なんだから…」

ライトニングの呟きに、隼人が少々呆れながらも当然の事を言ってのける。

しかし、その言葉は本物で、彼らがいるのはとある無人世界の山の中であった。

といっても、この無人世界に海というのは存在せず、あっても大規模な湖ぐらいだ。

よって、砂浜などは存在しない。

それがどうしても不服なマリンは、口を尖らせながら愚痴を言おうとするが、この二人に話しても軽く流されることは承知済みだった。

そして、後一人のメンバーに愚痴を話そうと振り返り、その顔を見た瞬間、

「はぁ……」

盛大に溜息を吐いたのだった。

「おい、チョット待て！　なんで俺の顔を見た瞬間に溜息をする！？」

「だって、名も無きA君に何を話しても無駄なんだもん……」

その容赦ない言葉にあんぐりと口を開け、固まってしまうA君。

だが、すぐさま表情を元に戻すと、このように言葉を放って見せた。

「A君じゃねぇ！　ちゃんと俺には……って名前があってだな…」

「はいはい、A君ね。分かりましたよー」

「ちげぇーーーっ！！！！！！」

やれやれと手を横にしながら首を振るマリンに対し、A君は更に大きな声を放って突っ込んでみせる。

と、二人がしょうもない漫才をしている最中、後方からとある人物が来るのに気付き、今までの会話を全て切り上げ、四人はザッと一列に並んで整列する。

「よし、集まったようだな…。これより、第３８班の訓練を行う」

彼らの目の前に立ったのは、予想通りにグラトス・レーン教官。この教官の表情を見た瞬間に、隼人とライトニングの表情が、またおまえか、という表情になったが、そんな空気をものともせず、マリンがバッと手を挙げて主張し始める。

「教官！　どうして合宿の訓練場が海じゃないんですか！？」

「海は第３７班が行っている。貴様等は山篭りで特訓だ！」

随分と惜しいな…と思うが、グラトスの山篭りという言葉を聞いた瞬間、四人は何とも言い出せない気分になる。

これより一ヶ月間、クロノ曰く『地獄なんてものじゃない』合宿が始まるのだった――――

◇

銃声が鳴り響いた瞬間、私はただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

目の前に倒れているのは、私の義弟（おとうと）。妹と結婚した人物であった。

今や亡骸となった彼の手には、違法であるはずの拳銃が握られており、信じられないといった表情で倒れていた。

私は恐る恐る後方を振り返り、私の義弟（おとうと）に銃弾を浴びせた人物を見る。

「何故……何故、撃ったのですか！？」

「あのままでは君が殺されるところだった。私にとっては、それは絶対に許されない事だ。それに、彼には射殺命令が出ていたのを忘れたのか？」

険しい表情のまま、私の目の前にいる白髪の人物は淡々と呟く。

私は、怒りで我を忘れ、その白髪の人物に向かって走ると、その胸倉を掴んでみせる。

「だからって、射殺する事は無かった！　説得すれば、あいつも分かってくれ……」

其処まで私が言った瞬間、私の左頬に痛烈な痛みが襲い、私はそ

の人物から離れる。
この時、私はその白髪の人物に殴られたのだと気付いた。
白髪の人物は続けて言う。
「奴がお前の義弟（おとうと）である事は知っている…。だが、それ以前にお前は私の教え子だ！　師である私にとって、お前は息子同然なのだよ！　その息子を目の前で殺されるなど、あってたまるか！」
白髪の人物の言葉に、私は目を見開く。
義弟（おとうと）を殺した人物であり、私の師だ。
憎悪が込み上げる中、私はどうしたらいいのかよく分からなくなった。
ただ、拳をグッと握り締め、ダンダンとその場に力強く叩きつける事しか出来なかった。
「ちくしょう……！　ちくしょう……！　うわあああああああああ！！！！！！！！」
私は拳を叩きつけながら吼えた。
それだけしか、私には出来なかったのだ。
『黒羽拓人造反事件』。
後にこう呼ばれた事件の概要を、私は語る事にする――――

第二話　合宿＋レポート１（後書き）

これから先は、士官学校の様子と過去話を並行して行います。

読みにくいと思いますが、どうかご勘弁を……。

第三話　合宿2＋レポート2

「おかあ――――さ～～～～～ん……」

情けない声を上げながら、一人の人物が崖の下へと落ちていった。
落ちていったのは、名も無き一般学生A君。
魔導師ランクはDランクと、何故この班に入れられたのかはサッパリ理解が出来ないわね。
崖から落とされたといっても、これで彼は三度目くらいになるかしらね？　懲りないな～と思いながら私も見てるのだれど。

だけど、上には上がいる。

私の遥か上には、既にこの山の上を行っている二人の姿が見える。
一人は黒羽隼人。そしてもう一人はライトニングという名前。
私――――名前はマリン・アスレスです♪――――は彼らの友人でもあり、この第37班で共に合宿を受けている身でもある。
この二人は、今期生の中でもトップクラス――いや、もはや化け物の領域に等しい。
教官たちからは目をつけられたように厳しい訓練をビシビシとやらされているが、めげる事なんか一度も無く、全部をトップレベルでやりこなしている。
あの二人の姿を見てたら、私自信なくしちゃうな～なんて思う時もあるけど。

『マリン・アスレス！　さっさと行動しろ！』

「サー、イエッサー……」

『もっと声を張れ！　貴様も突き落とされたいのか！』

「……サー、イエッサー、サー！！」

上からグラトス教官の声が聞こえてきたので、私はそんな風にして大きな声を出して応える。

正直、此処――第一訓練校の訓練は酷い。もはや身体的にも精神的にもボロボロにされそうなぐらい酷い。

でも、そんな酷い訓練内容だからこそ、将来の為にもなるらしい。…教官曰く、ね。

「はぁ……何時まで続くのよ、この山…」

物々と呟きながら、私は腕を伸ばして少しずつ先へと登る事にする。

でも、隼人達は私以上にきつい筈なのに、どうして私より先に行ってるのかしら？

だって、どう考えても二〇キロに近い重りをつけてるのよ！？

なのにヒョイヒョイって登っていけるってどういう訳！？

……ま、それが化け物って呼ばれるだけの所以か。別に軽蔑じゃないよ？　多分……尊敬？

はぁ～あ、空飛んで行けたらどんなに楽なんだろうか……と、改めて飛べる事の重要性に気付くマリンなのであった。まる。

◇

「はぁ〜〜〜〜……ようやく登りきった〜〜〜」

「お疲れ、マリン。はい、飲み物」

「サンキュー、隼人」

そういって私に飲み物を手渡してきたのは、あのさっき私が頑張って登っていた山をいとも簡単に登って見せた黒羽隼人。

私は彼から飲み物を受け取ると、それを流し込むように飲んで見せた。

うーん、やっぱりあんな阿呆みたいな訓練の後の水は美味しいね。

「はぁ……にしても、どうして隼人達はあんなに簡単にこの山を登れるわけ？」

「ん？　まあ……俺達は何度も経験したしな。グラトス教官に何度も突き落とされたりしたけど」

そういって苦笑を見せてくる隼人。

本来ならば、そんな無茶苦茶な訓練などしない。

まだ実戦訓練とか、コンビの連携訓練とかをやる筈なんだけど……彼らの場合はそうじゃないみたい。

勿論、隼人達も士官候補生なんだからちゃんとそういった訓練は私たちと一緒に受けている。でも、それ以外にも色々と……それはもう、鬼のような訓練を受けているらしい。

よくもまあ、逃げ出さないなと感心する。私だったら、多分一日と持たないだろうな～。

「よく生きてるよね。隼人もライトも」

「悪運だけは強いからな。そのせいじゃないのか？」

「そんなものかしらね～～？」

そんな答えに私は思わず呆れてしまう。

悪運だけで生きている？　……常識では考えられないわ。

でも、それを可能にするのが隼人とライト。……これから二人は、どんな道を辿っていくのだろうか？

と、そう思っていた矢先、私はふと頭に思い浮かんだ事を隼人に聞いてみることにした。

「……にしても、ライトはどうしたの？」

「あいつか？　あいつは……あそこだ」

そういって隼人は向こう側の方を指差す。

すると、その指先の向こうにライトの姿があって……山の下を覗き込むようにしていた。

「何してるんだろ？」

「……さんの登る様子を観察してるみたいだぞ。ほら、突き落とされる前に何度も落ちてるから」

「……ふーん」

ああ、そういえば忘れてたけど……まだ登ってなかったんだよね、A君。
それにA君にはこの訓練は荷が重過ぎるだろう。何せ、魔法無しと聞かされた時点で、彼は物凄い表情をしてたからね。

ちなみに、A君が山を登り終える頃には、既に2時間が経過していた。そのおかげで私達はグラトス教官から補習を喰らう羽目にもなった。
……覚えておきなさいよ、A君……。

◇

今思えば、六年前――――つまり、両親と妹、そして甥を亡くした時点で義弟(おとうと)は壊れていたのかもしれない。
あの時の悲しみは、私としても感慨深いものだった。
だが、義弟(おとうと)――――黒羽拓人の悲しみはそれ以上に深かった事だろう。
だから、“彼ら”と結託した。そして、時空管理局本局――――つまりは“空”の本部を襲撃した。
しかし、解せないのは何故拓人が“彼ら”と結託したかだ。
確かに拓人は科学者。空の穴など、当たり前の事のように知って

いる。
だが、私は信じられない。拓人は何が望みだったのか……。
考えられる方法としては、妻であるレインの復活――――それを吹き込まれたからであろう。
その吹き込んだ男こそ、イトロ・シュルーベン。陸士３７部隊に所属していた男であり、その実力はＡランク並みとされていた。
だが、
事実は違う。彼の実力はＳランク……いや、それ以上であり、陸士３７部隊を４分と持たず壊滅させた男だったのだ。
そして、現れた奴。私は彼と対峙し……逃げられた。
更に奴はこうもいったのだ。

――――これこそ、全ての終わりであり……全ての始まりなのです。終焉は刻一刻と迫っております。それを貴方に防げるか……見物ですね――――

その言葉の意味を、私は後に知る事になる。
だが、私はその現場を実際に見ることはなかった。
『黒羽拓人造反事件』。異端とされ、闇に葬り去りたい事件。
だが私は――――いや、誰もが気付いていなかった。
これこそ“彼らの始動であり、”“彼ら”の計画が始まったのだと――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1365l/

魔法戦記リリカルなのは　～駆け巡る雷光～

2011年10月6日16時30分発行